



連載：第1回

佐藤裕介

Yusuke Sato

スーパー赤蜘蛛フリーソロ

文：佐藤裕介 プロフィール写真：森山憲一 写真提供：佐藤裕介

人工ルートであった赤蜘蛛ルートをフリー化したラインで完全フリー化は25年前に成された。日本の山岳地帯にあるルートとして、最も素晴らしいルートのひとつであると今回改めて感じた。ルート終盤に待ち構える70mのスーパークラックは、フィンガーからハンドクラックがどこまでも続くかのように錯覚してしまう美しく長大な日本を代表するクラックである。

入山翌日に、ガイドとしてこのルートへと取り付いた。エイドクライミングで赤蜘蛛ルートを登ってから18年を経て同じ壁を見上げると学生時代、大岩壁を登ることが嬉しくてしょうがなかった記憶が沸き起こった。経験もクライミング能力もおかけの立場もあの時とは随分と異なるけれど、いまでも僕はクライミングが大好きだ。

最終的に10泊することになった七丈小屋で一人雨音を聞きながらまどろむ。珍しく昨夜は良く寝られなかつた。台風の通過を知らせる風を感じながら、また僕はあのルートのフリーソロについて考えた。

「スーパークラックをフリーソロしたらどんな気分になれるのだろうか。。。」

危険な思いつきによって、僕の睡眠は妨げられ小屋の中でも一人でクライミングに向き合うことを強いた。2つの台風を七丈小屋でやり過ごし、3度目の赤蜘蛛ルートのクライミングガイドを終えてから、僕は明日をいかに過ごすのか再考した。

「自分が登りたいのか。そうでないのか。」

トライの決定は、自分の心と体、そして岩の状態で全てを判断したいと思った。外部からのどんな情報や意見も排除して、純粋に己と自然を天秤にかけるべきで、その判断を鈍らせないように心がけた。信頼できる一人の友人と、山岳会に明日の概要を一方的にメールした後、通信機器の電源を落とす。送られた方はたまたものでないが、静かに独りで真剣に考えたかった。明日のルート状況、1P目のムーブ、自身の調子を順繰りに考えながら眠りについた。

フリーソロトライ

ヘッドライトを灯しゆっくりとアプローチを始めた。しらみ始めた8合目で、ストレッチ等をして体をほぐす。ロープを付けないのなら、徹底的に軽量化するのが優先されると考え、ヘルメット、ハーネス、通信機器、ウインドブレーカーなどを省く。そしてクライミングシューズで無理やり取り付けへ下降した。小1時間で誰もいない取り付けへ。

1P目 5.11b 20m

取り付き付近でアップするつもりだったが、壁を見上げると早くクライミングを始めたくて、入念にシューズを拭いてから取り付いた。身に付いているのは、チョークバックのみ。他はクライミングパンツの後ポケットに少量の水と食料が入っているだけで身軽なはずだけど、心にかかる重圧は変幻自在に僕を重くしたり軽くしたりするようだ。

昨日のクライミングでマスターしたつもりだったので、湿ってヌルヌルとしたホールドで足を踏みかえる時、小さく吠えてしまった。まだ、取り付きからの高度は5mほどではあるが、取り付きは斜めで下には100m以上のスラブが広がっていた。既に落ちることは許されない状況である。つづく濡れたクラックにも必要以上に力が入っていたようで終了点のテラスで、少々疲れを感じた。それでも、このピッチを確実にクライムダウンする能力は僕にはなく、登り切るほか選択肢は残されていない。最初から分かっていたことだ。水を少しだけ口に含み、パワーバーも少しかじってテラスを後にした。

2P目～4P目 5.8～5.10

2P目の快適なハンドジャムを先ほどの疲れを癒すように、意識してゆっくりと丁寧に。

ロープを付けて登攀した時には、気にならなかつた3P目がフリーソロでは予想以上に厳しかつた。コーナーステミングから始まるアリケートなスラブで、前半から強いストレスを受けながら進んでいくと、5cmほどののっぺりしたホールドに左手をブッシュした体勢で動きが完全に止まってしまった。安定を保つた体



勢から動くことを本能が拒否していた。ぎこちない動きで脱したもののは自分のヘッピリ腰ムーブを、もう一人の自分が俯瞰的を見ていて無様なクライミングに幻滅している。終盤でも濡れたフットホールドにビビって、普段使ったことのない草付を握りしめながらスマーリングした。精神的に消耗し、斜めの小テラスで一休み。ハングを越して簡単なクライミングで大テラスへ到達した。

ソロはついオーバースピードになりがちだ。強制的に15分の休憩とする。スーパークラックをイメージしながら、テラスに寝ころんだ。空気は澄んでいて爽やかだが、ウエアは少々汗ばんでいた。先ほどのスラブでかいた嫌な汗を思い出す。

「あんなクライミングをする為に、来たわけじゃない。」

気持ちを切り替え、これからのクライミングに集中した。スーパークラックは、グレード的に一番難しいピッチではあるが、ジャムが続く70m。自分にとって不確定なムーヴは出てこないはずだ。

5P目にあたる簡単な30mでクラックの取り付き。見上げるクラックは今日も美しい。でも、いつもよりも、なんだか長大に見えてしまった。立ち眩みのような、体をコントロールしきれていない感覚を覚える。しばらく深呼吸して、「できる。リズムとフットジャムを意識」と呟いてから取り付いた。

6P(スーパークラック) 5.11d~5.12a 70m

始めの10mはやさしいハンドジャム。リズムよく上がって、1m左手のフィンガーに移った。慌てず、止まらず、確実なジャムを繰り返す。不安はなかった。中間部の一番細くなるセクションが思いの外濡れていって、プレッシャーが高まったが後戻りも、立ち止まる事も許されない。ひと吠えとして、濡れた指と濡れたクラックを無視してジャムを繰り返した。ハンドジャムが決まるようになって初めて、大空間を見下ろす。足下には美しい50mのクラック、その下は何100mと切れ落ちスラブが最下部に広がっている。落ち着いてその絶景を心に刻む。もう、このクラックで落ちることなどない。落ち着いてリズムよくこのルートの一番おいしい部分を楽しんだ。

「スーパークラックをフリーソロしたら、あのハンドクラックで歓喜の雄叫びをあげるのだろう。」

取り付く前に予想していた事を思い出し「そんなことは無いな」と冷静に考えながら、クライミングを続けた。

70mのクラックを登り終えテラスに立ったが、喜びとか安堵と言った感情からは程遠く、心は次の最終ピッチに向けられた。立ち止まりもせずに5.10のスラブ直下まで移動する。早くも太陽がスラブを照らしていたが、ホールドがヌメル程ではなさそうだ。前腕のパンプはないが、手のひらの疲れがあって5分程靴を脱いでレストした。

7P目 50m 5.10

最終ピッチとなるスラブは、当初から警戒していて昨日も1回登った後、トップロープで核心部を練習している。集中力を高めて、取り付いた。スラブに散りばめられた5mmのカチホールドを淀みなく捉え続け、迷いなくスタンスにシューズを押し当てた。完全に自分をコントロールしたクライミングが途切れ

スーパー赤蜘蛛のスーパークラック

ることなく、終わりを告げる大木を掴んだ。フリーソロはこうあるべきと思い描いていたクライミングがこのピッチでは実践できた。意識的にそれを抑えていたわけではないが、感情の爆発はなく、続く容易なクライミングにすぐさま取りかかる。慌てる必要などどこにもないのだが、高ぶった心と体で息を弾ませながら心地よいクライミングを続けた。

(続く)

追記

僕は大切な友人をフリーソロで失った。丁度5年前の悲しい事故を、トライを検討している山小屋の中でも思い出していた。9月7日が彼の命日だ。

フリーソロをしてはいけない。とは思わない。フリーソロは最も純粹で、おそらくクライミングの原点だ。だからと言って僕はこれを他人に勧めるような事は絶対ないし、このジャンルを追求するつもりもない。気が向いたら、また思いついたようにやるかもしれないが、この原稿を一番に読んでもらった妻の心中を思うと、心がチクチクと痛む。

登攀日 2016年9月10日

4:30 七丈小屋

6:30 取り付き

7:15 大テラス (15分休憩)

8:14 A フランケ頭の岩小屋

クライミング時の装備

水 100ml, パワーバー半分、パワージェル1、
チョークバック、クライミングシューズ

